

書 評

伊藤詞子編. 『たえる・きざす』(生態人類学は挑む 6) 京都大学学術出版会, 2022年, iv + 331 p.

飯田 卓*

ニューアカデミズムの宿題

若い読者はご存じないかもしれないが、1980年代に『構造と力』という哲学書がベストセラーになった[浅田1983]。いまや古典となったジャック・ラカンらを導きとして、フランス構造主義をいかに乗り越えるかというのがテーマで、当時はニューアカデミズムの代表作とされ、大学に籍をおかない文化人も注目し、その影響は芸能人にまで広がったといわれる。同時に『構造と力』は、人類学を含め人文社会学全般で流行した構造主義理論の欠陥を明確に意識しており、それを乗り越える構想のもとにポストモダニズムを日本でいち早く紹介した書籍のひとつでもある。

団塊の世代に属していた評者の指導教員や、それと同世代の生態人類学者はポストモダニズムとかなり距離をとっており、ほとんど無視するのに近い態度をとっていた。その理由としては、カラハリ狩猟採集民に関する伝統主義者と修正主義者の論争において、日本の生態人類学者が伝統主義に与するいっぽう、修正主義者がポストモダニズムの影響をかなり強く受けていたこともあげられる[ス

チュアート1996]。『構造と力』も、評者はほとんど話題にした記憶がない。前置きが長くなったが、本書『たえる・きざす』は、生態人類学の立場から構造主義に対峙するための本だと評者は理解している。『構造と力』から40年、『たえる・きざす』はポストモダニズムについてひと言も言及していないが、その問題意識をうけ継ぐ点で画期的だと評者は思っている。

浅田が乗り越えようとした「構造主義」とは、その原点であるフェルディナン・ド・ソシュールまで遡ったときに明確である。ソシュールの言語学では、有気音と無気音の区別に代表されるさまざまな対立項の組みあわせから言語が成り立っていること、また自然において両者は連続的であるにもかかわらず、言語学では両者に区別を設けることを前提としてきた。さらに、言語学の立場に立つにせよ文化記号論に依拠するにせよ、構造は記号(コード)の体系(システム)であり、未知の発話や出来事に直面しても構造は形を崩さず、新事象を漏れなくみずからの内に取りこむ。構造は、世のなかのあらゆるものを分節的に捉えて成長していく不変の体系なのである。しかし浅田は、変化しつづける現代社会を捉えるために、構造主義では限界があると考えた。そして、構造主義が検知しきれないことがらを捉えるための方法論が、大きな物語と境界(上記の文脈でいえば、分節)の消滅を背景に登場すると浅田は期待した。¹⁾

その40年後の現在、構造主義の弱点は克服されるどころか、人文社会学全般さらには自然科学にまで伝染してその綻びを露呈する

* 国立民族学博物館

にいたった。いまや、変化しつづけるのは「構造」や人文社会学的現象ばかりでなく、地球規模の物理現象にまで及んでいる。こうした現在進行中の変化に対して、科学は、総力を結集しても説明を与えられない。このことは、人新世の「きざし」を察知しようやく、文化人類学が自然現象をも対象としはじめたばかりであることからもうかがえる。

ポスト構造主義の生態人類学

生態人類学においては、民俗分類以外の局面で構造主義が援用されることはほとんどない。しかし、多くの古典的研究は明らかに、その分析対象をシステムとして捉えてきた[Rappaport 1967; Watanabe 1968]。また、統計的な手段を用いるさいには、さまざまな属性をもつ人たちを分節して、サンプルに含めるか含めないかを判断してきた[飯田 2008]。生態人類学においても文化人類学や他の記号論的分野と同じく、体系と分節を克

服しつつ渾沌を理解し、社会の変化を記述し分析する方法論を開拓していかななくてはならない。

われわれの目の前にたちはだかるのは、まづもって方法論の問題である。しかしその背後には、科学的認識の限界ないし無限性というとてつもなく大きな問題が控えている。このため本書では、テーマを方法論の吟味に限定せず、さまざまな方法論の使い手たちが「構造化されないナマ身の対象」と格闘するようすを示して、とり組むべき問題の大きさをうかがわせている。編者の伊藤詞子が序論で投げかけるキーワードには「渾沌」「自然と文化」などがある。現代のわれわれが直面する問題は、あまりにも渾沌としているため、自然と文化の2側面をきり離しても意味をなさないからである。

本書を読みすすめるには、他にも重要なキーワードを念頭においておいたほうがよいだろう。そのひとつが、第Ⅰ部および第Ⅱ部のセクション名にあらわれる「アウト・ワールドとインナー・ワールド」である。このキーワードは、内と外を分節したうえでシステムを見る点で、『構造と力』以前の方法論を思わせる(注1を参照)。しかし対立する二者の相互作用といった単純化は意図されておらず、むしろ課題発見的な措置としてこれらの語が選ばれたのだろう。また、序論的な性格をもつ第1章で足立薫が章名に用いている「生成と消滅」は、最終章のひとつ手前の第8章で内堀基光がとり上げる「個の死と類の存続」というテーマにも響きあっており、見逃せない。生成にはすでに消滅の

-
- 1) 浅田がとり組んだ問題は、文化人類学の分野にかぎってみても、簡単には解決しないことがわかる。浅田の試みの前史としては、王権論やトリックスター論を紹介した山口昌男の諸論考、ヴィクター・ターナーの儀礼論、エドモンド・リーチの政治体系論などがあった。しかしいずれにおいても、構造から排除された要素が構造的変化をもたらすことは想定されていない(構造を活性化することはしばしば論じられる)。いっぽう、1980年代以降には、マーシャル・サーリンズの『歴史の島々』やモーリス・ブロックの『祝福から暴力へ』などが構造主義を乗り越えて展望を与えたといわれるが[サーリンズ 1993; ブロック 1994]、評者はじゅうぶん納得していない。構造がゆるやかに変容していくこと自体は、学術的方法の力を借りなくとも、多くの人たちが経験してきたからである。急速な構造変化を理性によって制御する方法が見つからないかぎり、理性にもとづく科学による勝利宣言はできないだろう。

「きざし」がみられるのであり、次第に大きくなるその圧力に「耐える」のか、それができずに「絶える」のかという「変化」に対する関心が、構造や体系の問題からやや距離をおいて、ここで前景化されている。ただし、「きざし」がしばしば構造や体系の外部に由来するとみなせる事実を考えれば、構造・体系の問題と変化の問題はやはり相即不離なのかもしれない。

本書の各章では、これらのキーワードを念頭に、執筆者たちがさまざまなフィールドで直面した掌握しがたい現実を描いている。以下、手短ではあるが紹介しよう。人類共通あるいは地球規模の課題に対して、執筆者らがそれぞれの立場で格闘していることがわかるはずだ。以下の3節の節題は、本書を構成する3つのセクションの題名である。

第Ⅰ部 アウター・ワールド再考

足立薫による第1章「環境の生成と消滅」は、コートジボアールの熱帯林が霊長類学のフィールドとして選ばれた時点ですでに、人為的影響を大きく受けていたと指摘する。それだけでなく、高層ビルが建ちならぶ香港の一角にカンクイザルが生息しており、近年導入されたアカゲザルと交雑をくり返し、ヒトから餌をもらいながら生きつづけているという驚きの事実を報告している。

四方籌・藤澤奈都穂・佐々木綾子による第2章「アグロフォレストリーとともに生きる」は、農学と林学の空隙を突くように隆盛しつつある生業実践を報告するものである。タイ北部のチャ栽培、パナマ中部のコーヒー栽

培、カメルーン東南部のカカオ栽培がとり上げられているが、樹木作物を栽培していればアグロフォレストリーと呼べるわけではない。これらの樹木を庇蔭樹として他の作物を育てたり、家畜飼養と組みあわせて有機物循環をうながしたりして、ポリカルチャーを目ざすのがその意味するところである。著者らは、それが焼畑といった他の生業システムや賃金労働とも親和性が高く、設計図にとらわれず発展していくシステムであることを指摘している。

勝俣昌也・神田靖範・伊谷樹一による第3章「タンザニア農村における家畜飼養のこれから」は、従来からおこなわれていたウシ牧畜にくわえて近年盛んになりつつあるブタ飼養をとり上げ、当初の調査項目に含まれていなかった家畜感染症が調査地域であらたに問題化しつつあると報告する。牛蹄疫やダニ熱、豚熱に起因すると思われる家畜大量死は、じつは単独の感染症の流行ではなく複数の流行が複合した結果である可能性が高いと勝俣らは論じる。しかも、ウシの大量死とブタの大量死は相互に関係している可能性があり、人獣共通感染症の「きざし」が克明に描かれている。

第Ⅱ部 反転するインナー・ワールドとアウター・ワールド

第Ⅱ部のセクション題はややわかりにくく、関係性の維持と構築を前景化するような題名のほうが適切だと評者は考えている。しかし書籍全体の趣旨には影響しないと考え、気にせず紹介を続けよう。

小林誠による第4章「つながりを維持し、葛藤を引き受ける」は、地球温暖化にともなう海面上昇に悩むツバルからフィジーの離島に移住した人びとの、文化変容についての報告である。文化変容という用語は、システムの内と外の分節を強く連想させるものの、文化人類学も21世紀に大きく変わってきた。テーマ的には、アイデンティティとその根拠のゆらぎが大きくとり上げられるようになり、民族誌記述の方法においても、一定点でなく複数地点やそのつながりが視野に収められることが多くなった。これらの変化を要約するさいには、根源（roots）から移動経路（routes）に焦点が移行したとも述べられる[クリフォード2002]。これらの議論をふまえ、小林は、伝統の重要性を強調する。予想のつかないさまざまな変化に対処するうえで、ツバルからの移住者はつながりを重視する。ここでいうつながりには、故地その他の場所に散在している知人とのつながりだけでなく、過去の人びととのつながりも含まれる。伝統的なやりかたを覚えておくことは、不可解な変化への備えとして有効な場合があるからである。

竹ノ下祐二による第5章「霊長類の社会変動にみるレジリエンス」は、餌付けされたニホンザルの群れと動物園で飼育されるゴリラの観察から、社会関係の維持と構築を考察する。いずれの事例も、従来の霊長類学が軽視してきた「採食上の利害対立を免れた」特殊な例である（足立論文も参照）。いわば、生存のために他個体との関係を維持する必要がないにもかかわらず、ニホンザルは母系的

複雄複雌群と呼ばれる構造を維持し、ゴリラは顔見知りでない「同居人」と仲良くなろうとして試行錯誤をくり返す。これは小林論文と読みあわせたい知見だが、図らずも構造への希求が明らかにされた点でも、本書にとっては大きな意味をもつ。

竹川大介による第6章「『互惠』と『共感』にもとづく正義の実現」は、ソロモン諸島における村内の葛藤解決をとり上げる。村内の葛藤といっても、その背景には村外居住者による村内権力の掌握、イルカ漁をめぐる国際団体からの圧力、村落開発プロジェクト、地球温暖化による海面上昇など、さまざまな「アウター・ワールド」からの作用を無視できない。そうした問題の解決において有効な手段のひとつは、互惠にもとづいた贈与、すなわちモノの譲渡である。これは友好の証である場合が多いが、場合によっては、贈与の受け手を負かそうとする競争的応酬だと誤解されかねない。そこで重要になるのが「共感」である。認知心理学が明らかにしてきた「心の理論」にもとづいて、たんなる同情にとどまらない形で他者を理解し、行為を調節することが必要なのだ。竹川は、正義とは絶対的価値の追求によって実現するのではなく、当事者たちが互いの文脈を探りあいつつ達成されるのだと結論し、このことを「普遍的道徳基盤」と呼んでいる。

第Ⅲ部 渾沌を生きる

風間計博による第7章「国境を越えた集団移住と『環境難民』」は、小林論文とよく似た事例で、故地キリバスを離れることを余

儀なくされた人びとに着目し、小林論文と同じくフィジー定着後の生活を報告している。ただし、本章で着目されるバナバ人は、海面上昇だけをきっかけとして離散したのではない。燐鉱石採掘の発展と太平洋戦争勃発による企業の引揚げ、燐鉱石企業の基金でおこなわれた採掘労働者のための土地買収という一連の歴史が、移住の背景となっている。その後、燐鉱石採掘の中断とそれにもなう採掘料支払いの中止により、経済的に困窮したバナバ人の問題はフィジー国内の外交問題といえるような状況にある。

内堀基光による第8章「個の死と類の亡失をめぐる人類学的素描」は、特定集団における死を論じたものではない。生物としての死がヒトにおいては社会的な意味を帯びており、自身の死が他者の死によって予期されているという一般的な不思議を論じたものである。このことをとおして、内堀は人類学と霊長類学との分節を正当化するいっぽう、個としての死と類（種）としての存続が矛盾しないという事実のはらむ問題を指摘する。それは、出生の減少は個にとってなんら問題でないため、人類の滅亡は時間の問題だと開きなおる「反出生主義」の議論である。内堀はこのことについて解決を示していないが、評者にとってこの問題は、理性による分節のはてに理性をも渾沌に陥れる人間の宿業のように思えてならない。

伊藤詞子による終章「カソゲの森にきざすもの」は、本書全体の結論ともなっているが、同時に、「生態人類学は挑む」シリーズ全体の趣旨とされる「実直で妥協のない

フィールドワーク」の成果でもある。舞台となるカソゲはタンザニア、タンガニーカ湖畔のマハレ国立公園にある森である。西田利貞が霊長類学者としてチンパンジーを、掛谷誠が生態人類学者としてトングウェを調査したこの土地で、本書が締めくくられるのは象徴的である〔西田 1973; 掛谷 2017, 2018〕。伊藤が指摘する「変化」は気候変動だけでなく、霊長類学の進展やトングウェの域外移住、国立公園化、それにもなう森林の生長と植生遷移なども含まれる。しかし伊藤はそれを「野生がえり」でなく自然と人為の交錯した「渾沌」と捉える。伊藤はこの終章でもあえて結論を示さず、むしろ読者がこの認識論的問題にともにとり組むよういざなっているようである。

突破口としての長期調査

本書の内容を紹介しながら、まとまりのない事例をまとまりなく書き連ねてきたという思いを拭いきれない。しかし冒頭に述べたように、評者は、本書を画期的だと思っている。構造主義やポストモダニズムとの和解などはどうでもよい。本書が画期的なのは、社会的課題との接点を生態人類学がとり戻す契機になりうることである。「生態人類学の本来の姿は、^{パソロジカル}病理学的な性向をもってはいない」と大見得を切った先人もいたが〔伊谷 1995〕、それは「社会問題に目を向けないフィールド研究」を意味していたわけではないだろう。むろんカソゲならカソゲにおいて、離島国家なら離島国家において、生態人類学者たちは現地の社会問題に目を向けてき

た。しかし、地球規模で問題が進行しつつある現在、また交通や通信が地球規模の大量コミュニケーションを実現した現在、現地の問題はわれわれの問題でもある。方法論に乏しい文化人類学の分野ですら、人新世やアクターネットワーク、パースペクティヴィズムなどの概念提案をおこなってきた。生態人類学は、分節的ではあってもさまざまな現象を質量ともに分析してきたのだから、文化人類学よりも有利な立場にある。その意味で、決定版ではないながらも、社会問題に鋭い切り口を与えるための方法論が本書で示されているればもっとよかった。

生態人類学の利点はもうひとつある。伊藤が示したように数十年におよぶ質量ともに充実した調査データを提供できる点である。研究者の個人史をふり返っても、特定の視点にもとづいて半世紀以上のデータを集めつづけることはむずかしい。地球上のすべての地域でそれをカバーするのは、とても無理である。しかしいくつかの地点においては、それが可能である。ヒト以外の動物個体の系譜関係や家族史を語ることすらできる。日本の財政や調査地の政局によって調査継続が危ぶまれる場合でも「耐える」。こんなことにこだわる学問は他にない。生態人類学の知見は、近視眼的に政策を変えつつ右往左往するいかなる国にとっても有用である。

いろいろ書いたが、即効を期待しないかたにとくに本書をお薦めする。なんら結論は示されていないが、生態人類学の魅力が詰まった本である。

引用文献

- 浅田 彰. 1983. 『構造と力—記号論を超えて』 勁草書房.
- ブロック, モーリス. 1994. 『祝福から暴力へ—儀礼における歴史とイデオロギー』 田辺繁治・秋津元輝訳, 法政大学出版局.
- クリフォード, ジェイムズ. 2002. 『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳』 毛利嘉孝ほか訳, 月曜社.
- 飯田 卓. 2008. 『海を生きる技術と知識の民族誌—マダガスカル漁撈社会の生態人類学』 世界思想社.
- 伊谷純一郎. 1995. 「まえがき」 秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎編 『生態人類学を学ぶ人のために』 世界思想社, i-v.
- 掛谷 誠. 2017. 『人と自然の生態学』 京都大学学術出版会.
- . 2018. 『呪医と精霊の世界』 京都大学学術出版会.
- 西田利貞. 1973. 『精霊の子供たち—チンパンジーの社会構造を探る』 筑摩書房.
- Rappaport, Roy A. 1967. *Pigs for the Ancestors: Ritual in the Ecology of a New Guinea People*. New Haven & London: Yale University Press.
- サーリンズ, マーシャル. 1993. 『歴史の島々』 山本真鳥訳, 法政大学出版局.
- スチュアート, ヘンリ編. 1996. 『採集狩猟民の現在—生業文化の変容と再生』 言叢社.
- Watanabe, Hitoshi. 1968. Subsistence and Ecology of Northern Food Gatherers with Special Reference to the Ainu. In Richard B. Lee and Irven DeVore eds., *Man the Hunter*. New York: Aldine de Gruyter, pp. 69–77.